

SHOW-HHEYシネマルーム

★★★★★

イン・アメリカ ～三つの小さな願いごと

配給／20世紀フォックス映画

2003（平成15）年11月12日鑑賞

<東宝試写室>



監督・製作：ジム・シェリダン
脚本：ジム・シェリダン、ナオミ・
シェリダン、カーステン・シ
ェリダン
出演：サマンサ・モートン／パデ
ィ・コンシダイン／ジャイモ
ン・フンスー／サラ・ボルジ
ャー／エマ・ボルジャー

みどころ

一家そろってのアイランドからアメリカへの移住。それは愛する息子を失った絶望から立ち直り、家族再生のためだった。困難を極めるマンハッタンでの新しい生活の中、一家は悲しみから解放され、新たな絆を取り戻していった。長女の目を通じて語られる家族の愛と絆のストーリーは感動的。映画はこうでなくちゃ……。『心温まる映画』を観たい方に絶対のおすすめ作。

<4人家族はアイランド人>

この映画の主人公は夫ジョニー（パディ・コンシダイン）と妻サラ（サマンサ・モートン）、そして、10歳の姉クリスティ（サラ・ボルジャー）と妹のアリエル（エマ・ボルジャー）の4人。

いや、もう1人影の主人公がいた。それはクリスティとアリエルの弟で、2歳の時、階段から落ちたことが原因で悪性の脳腫瘍で死亡したフランキーだ。ジョニーたち家族はフランキー死亡の傷から容易に立ち直ることができず、その「喪失感」を引きずりながら生きていた。そんな家族が選んだ再生への途は、アメリカへの移住だった。

ジョニーがニューヨークで俳優の仕事を捜し、新しい生活を始める。その「家族再生」のための第一歩は、アイランドからカナダへ渡り、カナダから国境を越えてのアメリカ入国だ。

<三つの小さな願いごと>

2歳で死亡したフランキーが、姉のクリスティに残した言葉。それは「願いごとには願

っていいことといけないことがある。そして、願えるのは三つだけ」というもの。クリスティは弟フランキーのその言葉を信じていた。そしてクリスティは、家族を乗せてジョニーが運転する車がアメリカの国境検問で引っかかっている時、たちまち「無事通過できますように・・・」、「一つ目のお願い」をしてしまった。

＜喧騒に満ちた街、マンハッタン＞

「自由の女神」の国、アメリカは自由の国。それは間違いない。

しかし、そのことは決して、アメリカが誰にでも「豊かさ」や「幸せ」を約束する国だということを意味するものではない。黒人問題を初めとする人種差別やアイルランド系移民などのマイノリティ集団の存在を見れば、アメリカは自由の国であり、実力社会、個人主義の社会であると同時に、レッキとした「差別社会」なのだ。

ジョニーたち家族は、こんな「自由な国」の大都会マンハッタンの安アパートで生活始めることになった。エレベーターはなく、部屋までは階段を昇るしかない。猛烈な熱波と湿気が襲ってきた夏になっても、クーラーがない。また隣人はシャブ中毒の男や、オカマ男など変な奴ばかり。重いエアコンをやっと手に入れ、自分の手で部屋まで運び入れたものの、スイッチを入れるやエアコンは火を吹き、たちまちお陀仏。何ともマンハッタンでの生活は大変なスタートとなった。

＜シェリダン監督自身の体験を映画化＞

この映画の監督であり、娘たち2人と共同で脚本を書いたジム・シェリダンの出身地はアイルランド。シェリダン監督は、脳性マヒのために左足しか動かないアイルランド人作家・画家クリスティーン・ブラウンの不屈の精神を描いた、デビュー作『マイ・レフトフット』（1989年）でアカデミー賞5部門にノミネートされ、以後、今日まで数多くの賞にノミネートされてきた世界的な大監督だ。

そして、この映画は、このシェリダンの半自叙伝。すなわち、家族4人でのアイルランドからニューヨークへの移住、故国アイルランドでの愛する息子の死亡、そして、ニューヨークでの3人目の女の子の出産などのストーリーは、彼の実体験そのもののなのだ。

また、重いエアコンを引きずって、ヤケクソ気味に車が行き交う大きな道路を横断したのも実体験だし、遊園地でE. T. 人形をもらうため、「ボールの穴入れゲーム」に、あり金全部をつぎ込んだのも実体験。

そして、この時父親を応援するクリスティは二つ目の願いごとを・・・。

そして、この映画ではこれらの実体験話はすべて、フランキーの死亡という現実を容易に認めることができず、いつもその幻想を引きずっているジョニーとサラの気持ちを浮かびあがらせる効果に結びついていく。

家賃を含むあり金すべてを賭けてやっと手に入れたE. T. 人形。

その帰り、ジョニーはハイな気持ちになり、目隠しをし、大声を出しながら子供たちと「かくれんぼ遊び」に戯れた。その姿を見たサラは、「私を捜してくれないの・・・？」と「挑発」し。そして子供たちを外に出し、二人だけの激しいセックスに及んだ。そしてその日にサラは妊娠。3人目の子供の「誕生」によって、遂にジョニーとサラはフランキーの喪失感から立ち直ることができるのか、と期待された・・・。

＜異色の友人マテオ＞

安アパートに住む異色の謎めいた人物は、下積みのアーティストである黒人のマテオ（ジャイモン・フンスー）。

「ハロウィーンの日」、クリスティとアリエルはアパートのドアを叩いて、お菓子をねだったが、誰もドアを開けてくれない。そんな時、ただ1人ドアを開けたのがマテオ。素直な心を持ったクリスティとアリエルはすぐにマテオと友達となったが、ジョニーはこの不気味な黒人が苦手。フランキー死亡の喪失感やイラつきの中でサラとケンカして家を飛び出したジョニーは、「お前はサラに気があるんだろう・・・」などと毒づく羽目に・・・。

しかし、これに対するマテオの答えが、すごい。「僕は生きている者すべてを愛している。クリスティとアリエルもそしてサラも。そして何より愛しているのは君だ」。そう、マテオは不治の病に侵され、孤独な生活の中で、自ら死と真正面から向かい合っていたのだった・・・。

そんなマテオが突然倒れた。必死にこれを看病するクリスティとアリエルに対してマテオは言った。「僕は別の星からこの国に来ているが、この国は僕に合わない。空気も暑さも。だから僕は自分の国に帰るんだ」と。

さあ、彼はどうなるのだろうか・・・？

＜サラの出産は？＞

サラの出産はスムーズではなく、逆に大きなトラブルが存在した。

子供が大きくなりすぎれば母体に危険が、逆に小さいうちに出産すれば赤ん坊に危険が、という困難な生命を賭けた選択を余儀なくされたのだ。尻ごみするジョニーに対して、「生命を賭けて出産に臨む」、そう宣言するのは妻のサラ。やはり女は強い・・・。こうなると男は何の役にも立たないもの。ただ応援部隊として働けしか能がない存在だ。

そして、病気で倒れたマテオが入院先で眠り続けている中、いよいよサラの出産の日が。しかしやっと生まれてきた赤ん坊は未熟児で泣き声をあげない。そしてびくりとも動かない。これを必死で見守るジョニーとサラ、そしてクリスティとアリエル。さてこんな中、どんな奇跡が起こるのだろうか・・・？そしてクリスティの「三つ目の願いごと」はかなうのだろうか・・・？

＜感動的で涙を誘うラストシーン＞

ラストシーンは安アパートの狭いベランダの上。新たに1人増えた「家族」全員は、やっと今日アパートに戻ってきた。この日、空には満月のお月さまが……。そんなお月さまを見ながらジョニーはクリスティを呼び、「E. T. が自転車に乗って空を駆けてお月さまに戻っていったように、マテオが空を駆けているのが見えるだろう」と語りかけた。

すると、クリスティはアリエルを呼び、同じように語りかけた。このようにして3人は空を駆けていくマテオに対して「さよなら」と語りかけたのだ。3人の目には本当に自分の星に戻っていくマテオの姿が見えたのだろうか……？

こんな中、この映画の「進行役」と「語り」をつとめていたクリスティは、ジョニーに対して、新たな家族として赤ん坊が加わった今、フランキーにも本当のさよならが言えるでしょう、と話しかけた。そして今、ジョニーは心の底からフランキーと別れを告げることができたのだった。

今までずっと引きずってきたフランキー死亡という喪失感から、今やっと解放され、新たな家族の生活がスタートした瞬間だ。周りの席では、先程からすすり泣きの声が……。出産シーン、クリスティの輸血シーンあたりから目がウルウルしていた私も、思わずどっと涙が溢れてきた。感動的なラスト。

やはり映画はこうでなくちゃ……。アカデミー賞有力候補作品となること間違いなし！

＜2人姉妹の輝く演技に拍手！＞

この映画は特別な事件を描いたものではなく、シェリダン監督自身の体験をもとに失った息子フランキーへの想いを軸として、家族の愛と絆を淡々と描いたもの。

そしてこの映画は、10歳の姉のクリスティの目を通して、マンハッタン街の中でジョニーたちの家族が再生していく姿が語られる。このクリスティは10歳ながら、長女らしい「しっかり者」。弟フランキーを失った悲しみを自らも抱えながら、それを表に出さず、失意の両親を支えてきた。

こんなクリスティがはじめて自分の思いをぶちまけるのは、出産した母と誕生した赤ん坊への輸血の時。心配する父ジョニーと母サラに対して、「フランキーが死んで1年、私が一家を支えてきたのよ！」と言い放った。新しい「家族」の登場によって、今こそフランキーと本当の別れを告げることができるでしょう、とジョニーに言ったのも彼女。そんな「しっかり者」のクリスティを演ずるサラ・ボルジャーは実にチャーミングだ。

他方、休暇旅行と偽ってカナダからアメリカへ入国する際、「パペはアメリカでお仕事を捜すの……」とあっけらかんとマズイことを検問官にしゃべり、ヒヤヒヤさせたのは、おませで可愛い次女のアリエル。ジョニーがあり金すべてを賭けたゲームに臨んだのも、アリエルがE. T. 人形を欲しがったため。

そして、マテオと仲良くなり、マテオが「僕は地球とは違う星からやってきたんだ」と

語りかけたのもアリエル。そんなアリエルも、両親や姉のクリスティと共に、しっかりと家族の一員として、マテオと別れを告げ、そしてフランキーとも別れを告げた。全編を通じてアリエルの長い髪とつぶらな瞳、そしてそのふっくらとした可愛い顔は印象的で忘れることができない。

こんなアリエルを演ずるのは、オーディションで選ばれたエマ・ボルジャー、7歳。この映画で俳優デビューを飾った彼女には、今後次々と出演依頼がくるだろう。

夫ジョニーと妻サラの演技も見事だし、謎の黒人マテオの演技もずば抜けたものだが、何と言ってもこの2人の姉妹の演技は天才的、そして感動的。

シェリダン監督と共にこの映画の脚本を書いた2人の娘ナオミ・シェリダンとカーステン・シェリダンも、子供の時はきっとこの2人のように可愛い娘だったのだらうと思わず想像してしまうが、それは余計なお世話か・・・？

2003年（平成15）11月12日記